2 Ep- 5

子どもの家庭生活と共感性、個別性、セルフ・エスティーム（第５報）　余暇活動において

木田淳子*、奈良由美子*、○藤田祥子、守野美佐子、高野愛子、辰巳理恵子、野口知有**、藤本多賀子**

（*大阪教育大、**大阪教育大・院）

目的　余暇活動にみる家族の共同が、子どもの共感性、個別性、セルフ･エスティームにどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

方法　小５・中２・高２の児童・生徒を対象に、質問紙法に基づく調査を実施した。調査項目は、余暇活動に関する①家族の余暇の共同頻度と楽しさ、②子どもの感動経験と親子の感動共有の実態である。これらの実態と子どもの共感性、個別性、セルフ･エスティームの形成との関連を、χ^2検定に基づき考察した。

結果　余暇活動にみる家族の共同の実態と意識をみると、高校生になるほど家族との共同行動は減少し、とくに男子に顕著である。「楽しさ」意識は、小学生ほど高い。そして家族一緒にしたいという希望も小学生が高くもっているが、高校生でも音楽活動等の共同希望は高い。また感動経験をみると、高校生ほど高いものの、親との共有は低位である。余暇を通じての共同頻度の高さは、子どもの中に楽しさ意識を生み出し、親子間のコミュニケーションを活性化させる。共同経験の豊かさや楽しさ意識は、感動経験や、感動共有の基盤となっている。そしてこのような家族の余暇活動の共同や感動の共有が、子どもの共感性の形成に深く関与し、また、個別性形成にも影響していることが明らかになった。